

目的 児童の通学服についての着衣実態を、気温にどのように対応して着用されているか、一年間の実態調査と意識調査を行い、通学服に関して衣服衛生学の面から検討を行った。

方法 調査対象は小学校5年生18名(男子7名, 女子7名)についてアンケートと着衣の衣服重量を計測する方法を用いた。また10々の体表面積当りの衣服重量を算出し、月別衣服重量の変化、環境温と衣服重量の関係から保温力のC10値を換算し、年間の体表面積当り衣服重量の動向を調査した。

結果 通学服の着衣重量に男女差がみられ、男子着衣重量は女子よりも重い傾向であった。季節的には冬は夏の4~5倍の着衣重量であり、着衣重量は4月から5月と9月から10月にかけて変化がみられ、特に上衣の衣服構成や枚数に多様化の傾向があった。体表面積当りの衣服重量は男子の年間平均844gに対し、女子の年間平均は797gであった。男子の年間平均重量に対し、最大重量は1057gであり、最少は624gであった。女子の最大重量は996gで最少重量716gである。環境温1℃の増減に対し、男女の平均体表面積当り衣服重量は33.3gとなり、平均の増減範囲は33.3±14.2gとなる。この1℃に対する重量から保温力1 C10の衣服重量は約300gに相当する。